

平成23年度 学校評価自己評価書

愛知教育大学附属岡崎小学校

1 総括

(1) 教育目標

- ①生活のなかから問題を見つけ、自ら生活を切り拓いていくことのできる児童の育成。
→「生きる力」の育成（生活教育の発展と充実）
- ②経験や体験を重視し、事実をもとに問題の解決を図ろうとする児童の育成。
→問題解決能力の育成
- ③友だちの気持ちを思いやり、互いに磨き合おうとする児童の育成。
→共感的な人間関係の形成

(2) 中長期経営目標

- ・自由で自立した人格の育成と社会的責任の自覚を養う。
- ・児童の多様な能力に対応した教育を行うとともに、個性を尊重しつつ学力の向上を図る。
- ・大学と連携し、子ども一人一人の個性と生活体験を大切にした「生活教育」についての教育研究を行う。
- ・安全で安心な教育環境を整備し、安全・健康教育を進める。
- ・国立大学法人附属学校として、大学と連携した学校マネジメントを推進する。
- ・機能的な学校運営を行うとともに、教職員の職能向上に努める。
- ・国際交流の充実に向けた学校づくりを進める。
- ・学校の様子や状況について、家庭や地域に積極的に情報提供し、学校評価を学校運営に生かす。

(3) 短期経営目標（本年度の重点目標）

①学習指導

- ・基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図る。
- ・自覚、共感能力を大切にし、解決したい問題に対する問題解決力を育成する。
- ・英語活動の充実・改善を図り、積極的にコミュニケーションを図る能力や態度を育成するとともに、言語に関する能力や国際理解の基盤を培う。

②研究

- ・創造的、協同的な問題解決学習を展開するなかで、ねばり強く創造的に解決する子どもの姿をめざす。特に、本年度は、協同的に学ぶ子どもを支える教師の営みのあり方を探る。

③教育実習

- ・教育実習生に対し、教育活動の基本的なあり方を具体的な実践を通して指導する。

④学校運営

- ・学校評価をもとにした改善点を点検しながら、よりよい学校運営をめざす。
- ・行事の精選・スリム化を図り、授業時間を確保する。
- ・時間外勤務の縮小及び業務の精選・効率化をより進め、教職員の健康維持を図るとともに、タイムマネジメントの意識を高める。

2 自己評価の実施体制

学校が経営目標を立て、具体的な実践を行い、その結果を次年度の学校経営方針に反映し、教育活動を改善するというPDCAサイクルに基づく学校評価を実施する。この学校評価を継続的に改善していくためには、目標を適切に改善していくことが必要である。そのために、本校では学校全体の教育目標とともに、めざすべき成果やそれに向けた取り組みに関する中長期と単年度の目標を具体的に設定している。

本年度実施した評価項目については、短期経営目標（本年度の重点目標）をさらに具体化して設定したものである。また、昨年度の評価項目を継承し、継続的に評価することで、教育活動のさらなる見直しを図ろうと考えた。また、防災教育に対する取り組みについて新たに評価項目を設定し、安全・安心な学校生活に向けての改善策を探っていくことができるように心がけた。

アンケート調査の実施（実施時期 7月5日（火）～14日（木））については、①保護者 ②児童 ③教師を対象に行った。設問は20問とし、個人情報保護の観点から匿名性の担保に配慮した。

3 評価結果（「よくあてはまる」、「ややあてはまる」の合計の割合で判断した）

100%～80%・・・A	80%～70%以上・・・B
70%～50%・・・C	50%未満・・・D

「よくあてはまる」、「ややあてはまる」の合計の割合で判断した理由は、以下の3点である。

- ①「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりできていない」「できていない」のいずれかを選択する形で行っている。教育活動において、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の割合の多いことは、教育活動が円滑に行われていることを示すと考える。また、「あまりできていない」「できていない」の割合が多い評価内容の原因を分析し、緊急性や重要度を吟味したうえで、教育活動に反映させたいと考える。
- ②昨年度との傾向の違いを比較をするためにも、この方法をとる。
- ③評価対象となっている「保護者」「児童」「教師」の意識の違いからも、教育活動に対する意識や方法のあり方を探ることができると考える。

4 考察

（1）全体評価

設問1「附属小学校は、誇れる学校である」に対して、保護者・児童ともに、90%を超えるA評価であったこと、続く設問2「附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む教育を実践している」、設問3「子どもは学校へ行くのを楽しみにしている」においても同様の評価を得ていることは喜ばしいことである。本校では、授業のなかで子どもたちが楽しみながら主体的に問題を解決できる力を身につける授業づくりを進めている。設問4「授業づくりの工夫」は、それに相当するものであり、子どもの主体的な学びをめざして授業を積み重ねていることが、設問1・3に現れていると考える。また、設問4に対する教師の割合が減少したことについては、保護者・児童の割合は増加していることから考えると、教師が授業づくりに安易に満足せず、より向上心をもって取り組もうと考えているのではないかと考察する。20項目の設問に対しての評価で、3者ともにA評価が多く見られることから、本校の教育方針、教育活動を自信をもって教師は進めており、保護者にもおおむね理解されていると考える。

本年度新たに設定した評価項目，及び昨年度改善項目，目標値を設定した項目等については，次のような結果であった。

<本年度新たに設定，または変更した項目の評価結果>

①情報教育の視点では，コンピュータの基本操作の習得は求められているものの「情報モラル」「情報活用能力」といった面が重要である。昨年度までの「コンピュータの使い方」に特化した設問は改善の必要があった。

これに関する設問11については，教師・保護者・児童の質問内容を変えて調査した。

教師…「コンピュータを使った情報収集・活用に関する学習の仕方をていねいに教えている」「コンピュータの使い方」のみではなく，それらを使って情報収集や活用ができるような学習（家庭学習やチャレンジ学習も含む）の指導ができていないかを調査し，改善策を図る。

保護者…「子どもは，わからないことや知りたいことがあったとき，コンピュータや本を使って，進んで調べるようになってきた」「コンピュータの使い方」ではなく，「それらを活用し，情報を自ら収集しながら学習できるようになってきているか」を調査し，改善策を図る。

児童…「わからないことや知りたいことがあったとき，どんな調べ方をしますか(人に聞く)(本や図書室で調べる)(コンピュータを使う)」複数回答にし，学年毎の傾向を追う。また，改善策を図る。



情報収集・活用能力の向上					
設 問 項 目	設問 11 コンピュータを使っての学習の充実	教師：今年度 D 27.3%			
		保護者：今年度 C 67.2%			
		児童：			
			人	本・図書室	コンピュータ
		1年	64.0%	77.5%	34.2%
		2年	63.5%	54.8%	12.5%
		3年	70.3%	75.4%	44.1%
		4年	70.9%	63.2%	55.6%
		5年	85.7%	66.7%	79.0%
6年	67.6%	39.6%	80.2%		

教師のD評価について，学年で区切ると，1～3年教師は0%，4～6年教師は33.3%となっている。このことから，学年が上がるにしたがってコンピュータを使った学習の仕方を指導していることはわかるが，数値的に十分とは言えない。低学年ではお絵かきソフトを活用するなど，子どもたちにコンピュータを使用する経験をさせたい。学年が上がったとき，情報収集やひとり調べでコンピュータを活用する基礎となっていくと考える。教師自身が情報教育について認識を深めるとともに，取り組みの改善を図る必要がある。

保護者については，今年度新設の項目であるので，数値比較はできない。本校が大切にしている，主体的に自らの問題を解決していこうとする子どもの姿が，授業以外の場でも見ることができるよう実践の積み上げ，家庭学習やチャレンジ学習の進め方の支援を考えていきたい。こうしたうえで次年度以降の数値を注視したい。

児童の「どんな調べ方をするか」については、学年が上がるにつれて、コンピュータの活用が増えていく傾向から、子どもが情報収集する際の窓口が広がっていることがわかる。6年生の「本や図書室の利用」が少ないのは、コンピュータの使い勝手のよさが関係しているのかどうか、調べ学習の様子から探っていくことも考えられる。

- ②危機管理や安全・安心といった内容について、「登下校」「防災」の視点をもった具体的な調査にする。本年度力点を置いている内容であり、調査結果をもとに改善策を図る。
- 教師…「附属小学校は、子どもの命や安全を守るため常に危機管理意識をもって指導している」
- 保護者…「附属小学校は、安全な登下校や防災意識の向上に努めている」
- 児童…「先生は、安心して学校へ通えるように守ってくれたり、災害時の安全や避難について教えてくれる」



危機管理意識	
設問項目	設問 19 安全・安心な登下校，防災教育 教師： 今年度 A 90.9% 保護者：今年度 A 86.2% 児童： 今年度 A 93.5%

どれも A 評価であることから、教師は危機管理を意識した教育活動を進めており、保護者にも一定の理解が得られていると考える。児童については、昨年度の質問内容「先生は、安心して学校へ通えるように守ってくれたり、安全について教えてくれる」の結果 87.7% と比較すると、5 ポイント以上上がっている。登下校や避難の指導についての具体的な調査にしたことによる登下校指導や事前、事後を含めた避難訓練の指導の成果の反映と考える。今後も防災教育・減災教育については、「自分の身を自分で守ることのできる子どもの育成」をめざし、本校らしい取り組みを構築していきたい。

<昨年度の改善対策と今年度の結果>

【昨年度の課題とその対策】

- I スクールカウンセラーやアイリスパートナーの運用の充実
- II 基礎的な知識や技能の習得とコンピュータの活用についての取り組み
- III 基本的な生活習慣の定着
- IV 子どもたちの安心・安全のための学校設備や教室環境の整備

I スクールカウンセラーやアイリスパートナーの運用の充実

【昨年度の改善策】

- ①通信や掲示を使って、アイリスパートナーの活動を全校により知ってもらえるようにする。
- ②担任とスクールカウンセラー，アイリスパートナーとの連携を充実させ，情報を共有しながら，子ども理解を深める時間を確保する。
- ③大学の関係機関とも連携し，特別支援教育推進委員会において，それぞれの活動を振り返りながら，より効果的な運用を協議し実践する。



【本年度の取り組みと成果】

スクールカウンセラーやアイリスパートナーの運用の充実	
設問項目	<p>設問 6 スクールカウンセラーやアイリスパートナーを活用し，より深く子どものことをとらえ，成長に役立てようとしている。</p> <p>教師 昨年度 B 70.0% → 目標値 A 80% → 本年度 B 72.7%</p> <p>保護者 昨年度 B 73.9% → 目標値 A 80% → 本年度 A 81.9%</p> <p>児童 昨年度 C 64.7% → 目標値 B 75% → 本年度 C 68.6%</p>

・改善策①について

現在7名のアイリスパートナーが，ほぼ週に1回ずつ来校している。活動について「アイリス通信」を活用し，広報活動を進めている。アイリスパートナーによる教育相談活動を継続的に進めてきたことで，児童の数値は十分とは言えないが，認知度は上がってきていると考える。特に保護者の数値が目標値を超えていることは，今後の運用を進めるにあたり望ましいことである。

・改善策②について

担任とスクールカウンセラーやアイリスパートナーとの情報交換の場をできるだけもつようにしている。さらに多くの子どもたちと接する機会を増やし，相談活動や個に応じた支援を重ねていくことで，子どもたちをより深く理解するとともに，健やかな成長に寄与できる運用を確立していきたい。スクールカウンセラーは，保護者との相談活動を中心に行っている。地道な活動が続いており，現在6家庭の相談を受けている。今後も申し出に応じて相談活動を進めていきたいと考える。

・改善策③について

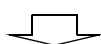
本年度，大学に勤務されている精神科医の先生を特別支援教育推進委員会にお招きし，

事例相談を進めている。今後も連携を深め、効果的な運用を模索していく。

II 基礎的な知識や技能の習得とコンピュータの活用についての取り組み

【昨年度の改善策】

- ①あおいタイムの充実及び、授業でも基礎的な知識・技能を定着させる時間を確保するとともに、その成果を児童自身が確認できる機会を設ける。
- ②本校の研究成果を披露する授業のみならず、あおいタイムや基礎的な知識・技能を定着させる授業も学校公開日等で公開する。
- ③全国学力状況調査でよい結果が出ていることを保護者会の場で説明する。
- ④自分の必要な情報を効率的に得たり、共有したり、発信したりするといった情報教育の考え方を教師が共通理解し、毎日の授業と結びつけて指導にあたる。
- ⑤授業参観等でコンピュータを活用する授業を公開する。



【本年度の取り組みと成果】

基礎的な知識や技能の習得																													
設問項目	設問 8 基礎的な知識・技能の定着を図っている。 教師： 昨年度 B 70.0% → 目標値 A 80% → 本年度 C 63.6% 保護者： 昨年度 C 63.4% → 目標値 B 75% → 本年度 C 67.9% 児童： 昨年度 A 87.7% → 本年度 A 92.5%																												
コンピュータの活用→情報収集・活用能力の向上																													
設問項目	設問 11 コンピュータを使っての学習の充実 教師： 本年度 D 27.3% 保護者： 本年度 C 67.2% 児童： <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <thead> <tr> <th></th> <th>人</th> <th>本・図書室</th> <th>コンピュータ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>64.0%</td> <td>77.5%</td> <td>34.2%</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>63.5%</td> <td>54.8%</td> <td>12.5%</td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>70.3%</td> <td>75.4%</td> <td>44.1%</td> </tr> <tr> <td>4年</td> <td>70.9%</td> <td>63.2%</td> <td>55.6%</td> </tr> <tr> <td>5年</td> <td>85.7%</td> <td>66.7%</td> <td>79.0%</td> </tr> <tr> <td>6年</td> <td>67.6%</td> <td>39.6%</td> <td>80.2%</td> </tr> </tbody> </table>		人	本・図書室	コンピュータ	1年	64.0%	77.5%	34.2%	2年	63.5%	54.8%	12.5%	3年	70.3%	75.4%	44.1%	4年	70.9%	63.2%	55.6%	5年	85.7%	66.7%	79.0%	6年	67.6%	39.6%	80.2%
	人	本・図書室	コンピュータ																										
1年	64.0%	77.5%	34.2%																										
2年	63.5%	54.8%	12.5%																										
3年	70.3%	75.4%	44.1%																										
4年	70.9%	63.2%	55.6%																										
5年	85.7%	66.7%	79.0%																										
6年	67.6%	39.6%	80.2%																										

・改善策①について

児童92.5%といった高い評価からは、子どもたちにとって「あおいタイム」が定着していることがうかがえる。ただし、教師や保護者の評価が低いこととあわせたとき、成果について教師や保護者と児童との意識の違いがあると考えられる。児童は「身につけている」と考えているが、教師や保護者は「定着が不十分」という認識の違いであれば、やはり成果を児童自身が確認できるような取り組みが望まれる。児童自身がフィードバックできるような方法を考えることで、より充実を図りたい。

・改善策②について

保護者の評価が微増ではあるが、昨年に引き続き低い。保護者からは、成果についてわ

かりにくい部分があると考え。授業参観や学校公開日では日程的に難しい面があり、あおいタイムの公開まで行うことができない。また、本校の公開授業とはそぐわない面もある。基礎的な知識や技能を図るねらいであっても、子どもが主体的に取り組む授業、あおいタイムの取り組みや成果を保護者にも知っていただくために、定着度を確認する機会を設け、保護者にその成果を知らせるような取り組みが望まれる。家庭の理解を得ることで、より成果を高めたい。

・改善策③について

学力調査については、本年度は震災の影響で実施されなかった。日々のあおいタイムの取り組みや成果、基礎的な知識や技能の定着状況や学習状況について、保護者会等で伝えていくような工夫をしたい。

・改善策④⑤について

昨年度までの「コンピュータの使い方」に特化した設問を改善した。情報教育の視点から、コンピュータはその一つに過ぎず、図書や聞き取りといった方法で情報を収集するといったことも重要な要素である。本校ではこうした方法を使つてのひとり調べも多く行っており、設問自体を情報教育といった視点で見直していった方が、本校の実態にあった調査項目であり、情報の収集・処理・共有・発信といった教育が情報教育であることから考えても妥当ではないかとの理由による。調査結果については、p 3～p 4でふれた。教師自身も情報教育の認識を深めるとともに、授業公開を含め、取り組みの見直しを図っていく必要がある。

Ⅲ 基本的な生活習慣の定着

【昨年度の改善策】

- ①学級や児童会活動で、基本的な生活習慣や規範意識について考える場をもち、その意味や必要性に対する意識を子どもの中に育てていく。
- ②帰りの会などで、一日の行動を振り返る場をもち、一人一人がめあてをもって行動できるようにする。
- ③PTAと協力しながら、生活習慣や規範意識について啓発活動を行うことと、清掃活動に積極的に取り組む態度を培う。
- ④登下校指導を行い、あいさつの励行や登下校時におけるバスマナーなど、子どもたちの生活のなかでルールやマナーについて考える機会をとらえ、学級活動や通学班会の場で継続的に指導していく。



【本年度の取り組みと成果】

基本的生活習慣の定着	
設問項目	設問 15 あいさつ、時間、ものを大切にするなどの基本的生活習慣定着 教師： 昨年度 C 50.0% → 目標値 B 70% → 今年度 D 45.5% 保護者： 昨年度 C 69.8% → 目標値 A 80% → 今年度 B 73.2% 児童： 昨年度 A 88.3% → → 今年度 A 92.8%
設問項目	設問 16 清掃指導 教師： 昨年度 B 70.3% → 目標値 A 85% → 今年度 A 81.8% 保護者： 昨年度 D 49.4% → 目標値 B 70% → 今年度 C 54.0% 児童： 昨年度 A 86.9% → → 今年度 A 91.0%

・改善策①②について

バスマナーについて児童総会で話し合う機会を設けるなど、子ども自らが問題意識を持ち、生活の向上を図る姿をめざした取り組みを進めつつある。地域からの情報や校内の様子で問題が生じたときは、指導のチャンスととらえ、各学級で指導事項の確認を図っている。特に問題なのは教師や保護者の評価に対して、児童の評価が高いという点ではないかと考える。児童自身は「できている」と考えている姿が、大人から見ると不十分であるといった現れではないかと考える。こうした傾向は、数年来続いているが、設問15については、教師と児童の差が拡大している。子どもの意識にどう働きかけるのか、指導の仕方を考える必要がある。家庭や学校が連携し、自由ななかにも節度が感じられる生活習慣の定着に努めたい。

・改善策③④について

設問16についても、設問15同様、大人と児童との差が大きく現れている。ただし、教師については、評価が大きく上がっている。これは児童とともに清掃に取り組む教師の意識が定着してきたことによると考える。教師がともに取り組むことで、児童が清掃に積極的な姿を多く見ることができるようになったのは、望ましい傾向と言える。保護者の評価も向上している。さらに向上するよう、継続的に取り組みたい。

P T Aとの協力として、親子清掃、全保護者による登校指導、通学安全部の登下校指導などを実施している。附ぞくっ子タイムでも、生活のマナーやルールの向上を取り上げ、学級指導に生きるように努めている。また、通学班会などを通して、登下校の安全とマナーについては繰り返し指導を行っている。今後も、さらに効果的な方法を模索するなかで、子どもたちの生活の様子をきめ細かく把握し、指導に役立てたい。同時に保護者にも、学年便りや父母教師会からの通知文などで様子を知らせ、学校と家庭が一体となった具体的な指導を進めたい。

IV 子どもたちの安心・安全のための学校設備や教室環境の整備

【昨年度の改善策】

- ①企画委員会や職員会の場で、学校設備や教室環境の点検を行い、優先順位を付け、大学に要望していく。
- ②学期末に行う学校設備等の環境点検を念入りに行う。



【本年度の取り組みと成果】

学校設備や教室環境の整備	
設 問 項 目	設問 17 安全に楽しく生活できるような学校設備や教室環境の整備 教師： 昨年度 B 70.0% → 目標値 A 80% → 今年度 A 86.4% 保護者：昨年度 C 65.9% → 目標値 B 75% → 今年度 A 83.4% 児童： 昨年度 B 71.6% → 目標値 A 80% → 今年度 B 72.4%

・改善策①②について

保護者の評価が大きく向上した。これは、全教室の空調完備が大きく関係していると考えられる。これまで、新体育館の建設、図書室のカーペット新調、中央通路設置、給食室改修、トイレ洋式化など、大学側への説明や要望により、改善されている。こうした施設・環境の整備状況についても保護者へ伝えていくような努力も学校として必要である。今後も安全性と先進性の観点で施設・設備の改善が必要であることを大学に理解してもらい、改善要求したい。また、学期末のみならず日頃からの環境点検を進め、子どもが安心して過ごせる学

校でありたい。現在ある施設や設備を丁寧に使用・活用することも教育の一環として必要である。基本的な生活習慣の定着とあわせて実施したい。

(2) 教師による自己評価

【Aのなかでも評価の割合が90%以上だった項目】 昨年度はなかった

設問1	附属小学校は、誇れる学校である。	→90.9%
設問2	附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む教育が実践できている。	→95.5%
設問3	子どもが学校へ来るのを楽しみにしている学校である。	→100%
設問10	子どもが英語に親しみ、楽しく学ぶことができる英語活動を行っている。	→90.9%
設問12	学校給食は、安全面、栄養バランス、味などの工夫がされている。	→95.5%
設問14	子どもの病気やけがなど、健康・安全面に配慮するとともに、常に細心の注意をはらっている。	→90.9%
設問19	附属小学校は、子どもの命や安全を守るため常に危機管理意識をもって指導している。	→90.9%
設問20	附属小学校は、学校評価をもとにした改善点を点検しながら、よりよい学校運営をめざしている。	→100%

附属小学校の職員は、自校の教育目標を理解し、子どもの自主性や主体性、育む授業づくりに取り組んでいることがわかる。子どもが、学びの過程で仲間とかかわりながら主体的に問題を解決し、「生きる力」を育み、たくましく成長する姿を願って、今後も授業づくりや行事への取り組みを価値あるものになりたい。健康・安全・安心な学校生活を強く意識しながら教育活動を進めていることも重要であり、今後も継続していきたい。また、学校評価をもとに、PDCAサイクルを意識しながらよりよい学校づくりをめざす職員集団である。21世紀の附属小学校をともに創り上げたい。

【C・Dと自己評価した項目】 昨年度はなかった

設問5	子どもの話をよく聞いたり日記をていねいに読んだりして、一人一人の子どもをとらえ、それをもとに学級づくり、授業づくりをしている。	→C 68.2%
設問8	あおいタイムや授業によって、子どもに基礎的な知識・技能の定着を図っている。	→C 63.6%
設問11	コンピュータを使った情報収集・活用に関する学習の仕方をていねいに教えている。	→D 27.3%
設問15	あいさつ、時間を守る、物を大切にするなど基本的な生活習慣が身につけている。	→D 45.5%
設問18	ホームページ、学年・学級だよりなどで、校内のできごとをよく保護者に知らせている。	→C 63.6%

1学期には研究協議会があり、学級によってはコンピュータを利用する時間がもてなかったところもある。2学期以降の授業で対応していく必要がある。調査項目の設定の仕方を、情報教育といった視点から見直したので、子どもが情報をどのように得て、互いに共

有し活用しているのか、調査結果の推移を見ていく必要がある。また、特に低学年においてコンピュータの活用率が低い（p 3）。文字を打つことや検索といった機能については難しいが、お絵描きソフトなどを利用して、コンピュータを使う楽しさを経験させたい。高学年については活用する機会が増えてはいる。週毎のコンピュータ室利用時間を計画的に運用するとともに、プリンターなどハード面の改善を図り、より使いやすい環境整備を大学へ働きかけていくことが必要である。設問5が低評価であるのは、子ども一人一人をとらえ、質の高い授業や学級をつくりたいという教師の願いである。設問18も同様、もっと保護者に情報発信したい教師の願いである。日々の業務内容を精選をもとに、子どもたちと過ごし、費やす時間を少しでも多く確保できるよう、タイムマネジメントの意識や能率的な仕事の進め方を教師自身が身につけていく必要があると考える。

（3）児童による授業評価・満足度調査

【Aのなかでも評価の割合が90%以上だった項目】 昨年度はなかった

設問1	附属小学校は、じまんでできる大好きな学校である。	→95.0%
設問2	自分で考え、進んで学習や仕事に取り組んでいる。	→92.3%
設問3	附属小学校は楽しい学校である。	→94.1%
設問4	毎日の授業は楽しい。	→91.5%
設問5	先生は、話をよく聞いてくれたり日記を読んでもらったりして自分のことを大切にしてくれる。	→90.7%
設問7	朝のスピーチで、上手に話をしたり、友だちの話をよく聞くことができようになってきた。	→91.1%
設問8	あおいタイムや授業によって、読み・書き・計算など基本的なことが身につけてきた。	→92.5%
設問10	英語活動の授業は楽しく、楽しみにしている。	→90.7%
設問12	給食は、おいしいし安心して食べられる。	→92.5%
設問15	あいさつ、時間を守る、物を大切にすることができるようになった。	→92.8%
設問16	そうじにまじめに取り組むことができる。	→91.0%
設問18	先生は、学年・学級だよりをよく出してくれる。	→90.2%
設問19	先生は、安心して学校へ通えるように守ってくれたり、災害時の安全や避難について教えてくれる。	→93.5%
設問20	先生たちは、アンケートなどをもとに、附属小学校をよい学校にしようとしてくれる。	→90.8%

多くの子どもたちが、附属小学校を誇りにするとともに、学校へ行くことや授業を楽しむことがわかる。授業改善を今後も推進していくとともに、設問7のような相互理解の場は、子どもたちのよりよい人間関係の形成、社会性の向上において重要である。今後も「聴いて応える姿勢」を大切に育てていきたい。基本的な生活習慣や清掃における大人とのギャップは気になるものの（p 7）、昨年度より評価が向上した項目が多くある。業務の改善により、教師が子どもに寄り添いながら具体の指導が入る場面の増えたことが好影響しているのではないか。ただし、設問1・3・5で「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」子どもは、それぞれ5.0%、5.9%、9.3%である。こうした子どもたちの様子も把握し、それぞれのニーズにあった指導を進めたい。附属小学校全ての子どもたちが学校に誇りをもち、楽しく学校生活を送れるよう努めたい。

【C・Dと評価した項目】

設問 6 附属小学校では、アイリスパートナーや五十嵐先生（スクールカウンセラー）に楽しかったことや、困ったことなどを話したりしたり相談したりできる。
→68.6%

アイリスパートナーについては、運用の仕方を検討しながら、地道な活動を続けている。今後、学級活動を利用して、ソーシャルスキルトレーニングのはたらきかけをしていく予定も立てている。こうした相談活動が子どもたちには十分には知られていない面があるので、運用方法を改善していくとともに、広報活動も進めていくことで、子どもたちの成長に寄与したい。

（４）保護者による満足度調査

【Aのなかでも評価の割合が90%以上だった項目】

設問 1	附属小学校は、誇れる学校である。	→94.3%
設問 2	附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む教育を実践している。	→98.1%
設問 3	子どもは、学校へ行くのを楽しみにしている。	→96.4%
設問 4	附属小学校は、楽しく学べる授業づくりの工夫がされている。	→95.4%
設問12	学校給食は、安全面、栄養バランス、味などの工夫がされている。	→96.3%

昨年度と同様の評価項目で高評価である。本校の自主性や主体性を重視した教育を理解し、誇りに感じていただいていることがわかる。昨年度は、ここに「スピーチによって聞く力や話す力の育ち」が含まれていたが、今回は入っていない（89.4%）。決して低評価ではないので、今後も自信を持って進めていきたいし、学校公開などで生き生きとスピーチに参加する子どもたちの様子を見ていただけるような場を設定したい。また、設問1・3について、約4～5%の保護者が「あてはまらない」と考えている。保護者会などで原因や思いを伺うなどして、全ての保護者の方が安心して子どもたちを通わせることのできる学校にしたい。

【C・Dと評価した項目】

設問 8	あおいタイムや授業によって、子どもに基礎的な知識・技能の定着を図っている。	→C 67.9%
設問11	子どもは、わからないことや知りたいことがあったとき、コンピュータや本を使って、進んで調べるようになってきた。	→C 67.2%
設問16	子どもは、そうじがよくできる。	→C 54.0%

本校の授業については高評価（前述の設問4）であるが、基礎的な知識や技能の習得・情報収集や活用については評価が低い。清掃については、継続的に指導しており、その成果が現れつつある（p7）ので、今後も力を入れていきたい。教師や保護者が子どもたちに求める姿と、子どもたちがめざす姿や自分を見つめる姿に差があることを注視し、学校と家庭が協力し取り組んでいきたい。

(5) 成果と課題

ア 設問1「附属小学校は、誇れる学校である」に対して、保護者・児童ともに、90%を超えるA評価であったこと、続く設問2「附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む教育を実践している」、設問3「子どもは学校へ行くのを楽しみにしている」においても同様の評価を得ている。本校の教育方針、教育活動を自信をもって教師は進めており、保護者にもおおむね理解されていると考える。全ての子どもたちが附属小学校を誇りに思い、楽しく学べる学校にするためには、「あてはまらない」と考える子どもたちや保護者の意見に耳を傾け、より充実した教育活動をめざす必要がある。さらに、設問4・5・18等の教師評価が低いことは、教育活動をより充実させたい教師の強い願いの裏返しと考える。今後も学校評価をもとにしたPDCAサイクルを生かし、教育活動を進めたい。

イ 「スクールカウンセラー」と「アイリスパートナー」について、教師・保護者の評価は70%以上であったが、児童の評価が昨年度より向上しているものの、68.6%とやや低い評価であった。アイリスパートナーは、週1日ずつではあるが、どの学年でも活動をしており、昨年度参加した学生の意見をもとに、本年度はステップアップの方策を思案中である。スクールカウンセラーやアイリスパートナーのよりよい運用を大学と協議していくとともに、広報活動も継続して進め、子どもたちにとって身近なものにしたい。子どもたちの心の成長に向けた発信的な取り組みである。今後さらに運用方法を検討していきたい。

ウ 昨年度の改善項目であった「基礎的な知識や技能の習得」「基本的生活習慣の定着」「清掃」「学校設備や教室環境の整備」は、評価が向上していることから、成果が上がりつつある。特に「学校設備や教室環境の整備」については、教師評価「B→A（本年度目標値達成）」、保護者評価「C→A（本年度目標値達成）」からうかがえる。ただし、数値的には十分と言えない項目があったり、設備や環境面の実態もこれで十分とは言えない。「基礎的な知識や技能の習得」については、あおいタイムを中心とした成果が現れつつある。今後も学習指導の方法や一人一人に応じた教育活動を推進していくことで、成果を高めたい。あいさつ・時間・物を大切にする（設問15）と清掃活動（設問16）について、教師や保護者の評価に比べ、児童の評価がいずれも高い（A）傾向にある。これは、教師や保護者が子どもたちに求める姿と、子どもたちがめざす姿や自分を見つめる姿に差があるからと考える。意義や意味、めざす姿について子どもに気づかせていくような教師のはたらきかけをもとに、子どもと大人の願いを共有し、学校と家庭が一体となって継続的に指導する必要がある。

エ コンピュータの活用については、調査項目の設定の仕方を、情報教育といった視点から見直した。情報教育が注目されていくことを考えると、コンピュータの操作に慣れ親しむことは大切であるが、自分の必要とする情報を効率的に得たり、その情報を共有し発信するといった視点で情報教育を理解したい。そうしたうえで、日々の学習指導と関連させながら指導する必要がある。1学期はコンピュータを利用する時間がもてなかったところもある。2学期以降の授業で対応していく必要がある。本年度の新設項目であるので、子どもが情報をどのように得て、互いに共有し活用しているのか、調査結果の推移を見ていきたい。